100周年への道(2) 聖ホセマリアの個人 的黙想と説教におけ るオプス・デイの使 命

シリーズ2回目の記事では、 創立者の個人的黙想と教えを 通じて、オプス・デイの目的 と使命についての理解を深く 掘り下げます。

2025/02/03

何年にもわたる予感、祈り、希望の後、1928年10月2日、聖ホセマリアは神が彼に何を求めているのかを

〈見ました〉。その時の超自然的な 力は師の人生全体を満たし、深く決 定的な形で彼の道を照らしました。 その力は彼の自由を奪うことなく、 むしろ完全な自己奉献という形で使 命を受け入れる彼の自由を強めまし た。聖ホセマリアは、その時まで神 が自身に何を望んでいるのかわから なかったと言っています。しかしつ いに、神が彼に求めているのは、世 界の中で聖性を求めるための、一つ の〈形〉を広めることだと理解しま した。その形は、日常生活と仕事を 重視し、信徒たちの責任感と一貫性 のある使徒職を促進するものでし た。彼は、この与えられたメッセー ジは福音と同じくらい古くまた新し いものであると言います。

「講話と講話の間でした。私は部屋 でひとりでメモを読んでいました。 その時、オプス・デイ全体についての光を受けたのです。感動してひざまずき、主に感謝しました。あの時の聖母の天使教会の鐘の音が感動とともに思い出されます。(…)そして、それまで断片的に取っていたメモをある程度まとめました」(内的覚書、306番)。

神の望みを見た聖ホセマリアは、そ の使命に対応する団体がすでに存在 するのか、それとも自らそれを始め なければならないのかを探りまし た。また、どのような人々がその団 体を構成するべきか、男性のみか女 性も含むのか、司祭も含むのか、そ の場合どのような教会法的構造を持 つのか、そしてどのような所属形態 になるのか、判別に時間を要しまし た。すこし大げさに言えば、1928年 10月2日、聖ホセマリアはオプス・ デイに所属し、〈オプス・デイにな る〉ことを固く決意しましたが、他 方では彼にとってオプス・デイの詳

細はまだすべて明らかではなかったということができるかもしれません。それは新しい命を胎に宿した母親が、その顔や瞳の色をまだ見ずに、その子を愛し、その子と対話するのに似ています。

この道が何を意味するのか、新しく 生まれたものの〈顔〉がどのような ものかを少しずつ理解し、それにつ いて神と語ることは、当時の聖ホセ マリアの内的生活そのものでした。 オプス・デイは彼の霊的生活、神と の関係、祈りや犠牲の中で形を成し ていきます。彼はその目的を描き始 め、ときおりそれを達成するための 手段をも指し示します。オプス・デ イの使命を深く理解し、そのカリス マを特定するということは、聖ホセ マリアが黙想し語ったオプス・デイ の様々な目的を理解し、それらを相 万に関連づけることを意味します。 それは、神への敬意と感謝をもっ て、創立者の内的生活に入り込むこ

とによってのみ成し得ることです。 この〈旅路〉は、彼の「内的覚書」 の一連の記録に描かれています。そ れらは、聖ホセマリアの主との個人 的な対話の証であり、その中でオプ ス・デイの習慣、活動、生活様式が 形作られていきました。

地を神と和解させる

残されている内的覚書のなかで、創立の目的の定義を確認できる最も古いものは、1931年の覚書です。聖ホセマリアは、あらゆる場所・状況においてキリストの王国を広げ、神に栄光を帰し、魂の救いに協力するという考えを述べています。これはおそらく、1925年のピオ十一世の回勅『Quas Primas(クアス・プリマス)』に順じたものです。

「『Christum regnare volumus(私たちはキリストの王としての統治を望む)』『Deo omnis gloria (すべ

ての栄光を神に)』『Omnes cum Petro ad lesum per Mariam(皆がペトロとともに、マリアを通してイエスへ)』。これら三つの言葉が、オプス・デイの三つの目的を十分に示している。すなわち、キリストの実効的な支配、すべての神の栄光、そして魂の救いである」(内的覚書、171番)。

「目的。一社会におけるキリストの 実効的な支配によって、キリストが 王として統治するように。Regnare Christum volumus。一神のすべての 栄光を求めること。Deo omnis gloria。一聖化し、魂を救うこと: Omnes cum Petro ad Iesum per Mariam(内的覚書、206番)。

聖ホセマリアは、キリストの王国を 地理的に広げること以上に、その支 配が人生のあらゆる場面と職業に及 ぶことに特に関心を抱いていまし た。それは人生のあらゆる領域、特 に日常生活と仕事に浸透していく使命です。これがまさに創立者が1931年8月7日に耳にした神の言葉の意味です:

「あのあわれな司祭が霊魂の奥底で 神のあの言葉を聞いたときの感動を 今、私たちは理解できます:et ego, si exaltatus fuero a terra, omnia traham ad meipsum、そして、わた しは地上から上げられるとき、すべ てを自分のもとへ引き寄せよう(ヨ ハネ12・32)。 同時にその司祭は、 主がこの聖書の言葉に付与したい意 味をはっきりと見ました。それは、 キリストを人間のすべての活動の頂 点に据えなければならないというこ とでした。彼は、この世のあらゆる 務めを通して、地を神と和解させる ことが必要であるということを明確 に悟りました。そのことにより、世 俗的なものは一世俗的でありながら も一神聖なものとなり、すべてのも

のの最終目的である神に捧げられた ものになると」(手紙3、2番)。

聖ホセマリアは、歳月をかけて、そ して手紙や指針またその他の文書を 順次書くことによって(それらを師 は多くの説教のベースとして用いま した)、自身の子どもたちに、創立 され堅固になったオプス・デイにつ いての霊的そして知的な遺産を残し ました。そのようにして、オプス・ デイの目的をより明確に説明してい きました。創立者が書き残した文書 には「suscitar(興す・生じさせ る) | という動詞がたくさん出てき ます。そして「興す・生じさせる」 という行為の主体は神になっていま す。あわれみ深い神の愛がオプス・ デイを興したのです。そしてそれは 明確な目的を伴っています。その目 的がオプス・デイの使命の枠組みを 構成します。

これらの目的を要約できる中心的な 考えは何でしょうか?それは、おそ らく次のように言い表すことができ るでしょう:神がオプス・デイを興 したのは、「この世界の一市民とし て生きるという信徒としての立場 | と「聖性と霊的生活の追求」という 普通の信者にとって一見対立するよ うに思われる2つのものを和解させ るためであると。言い換えれば、神 がオプス・デイを興したのは、地上 における神の道を開くため、すべて の人が日常生活を通して、いつもの 仕事場において、聖性を求め、神の 子として十全に満たされることを目 指すことができるためであると言う ことができます。

「主がこの地上にオプス・デイを興したのは、この葛藤を根本から解消するためでした。多くの信徒に向かって、彼らが自己を聖化し、他者の聖化を手助けするのは、まさにこの世界の中においてである、彼らの

職業や仕事の実践においてである、 彼らの置かれた状況に伴う務めを果 たすことにおいてである、というこ とを告げるためでした。その実現の ために主は彼らに、完全に世俗的な 修徳の道と精神、そして彼らの状況 に合致した手段を授けました」(手 紙23、18番)。

「主はこの数年の間にオプス・デイを興すことによって、次の真理が知られていない、または忘れられているとが決してないようにとないました。その真理とは、するした。その真理とはであるというる数のキリスト信者はこの世ので、日常の仕事を通して自己を聖化するべきであるということです」(手紙3、2番)。

「オプス・デイは、地上におけるあらゆる神の道をすべての人に開きました。なぜなら、あらゆる高貴な務めは神との出会いの機会となり得る

ことを示したからです。そのようにして、人間的な用事を神的な仕事に変えました」(指針、1935年5月、1950年9月14日〈1番〉)。

これらの目的が、オプス・デイの使 命の枠組みを構成し、その使命を教 会と人々の生活における〈酵母〉と します。特にこの酵母とは、地上の 事柄を仕事によって内側から刷新し ていく信徒のキリスト者としての生 活にほかなりません。これは後に、 第二バチカン公会議(教会憲章、31 番参照)においても指摘されます。 こうして、新しく設立されたオプ ス・デイは、おそらく忘れ去られて しまったことを思い起こし、生ぬる くなっていたものを生き生きとさ せ、消えていたものに火を灯し、教 会とその使命に協力しながら、新た な展望を開き、熱意を呼び覚まし、 平和と喜びを伝えていくのです。

聖ホセマリアの個人的な黙想の中 で、新しく設立されたオプス・デイ のアイデンティティと使命がどのよ うに形成されたのかを知るために、 ある研究者たちは™、創立者が用い る次のような厳かな語り口に着目し ています。それは「主がオプス・デ イを興したのは…」「私たちが来た のは…ということを思い出させるた めである| 「1928年10月2日以 来…」といった語り口です。彼ら は、このような言い回しの重要性を 指摘します。それらは、たまたま用 いられたものでも、単なるものごと をよりよく説明するための手段では なく、師の告げるメッセージの、そ れゆえ神から受けた使命の核心を指 し示しているからです。

「私たちは、罪人である取るに足らない者であることを自覚しつつも (…)、神の導きに身を委ねる信仰を持って、次のことを告げに来ました:聖性は特権を持つ人々のための

ものではなく、主はすべての人を招いておられ、すべての人からの愛を求めています。どこにいようが、彼らの身分や職業・仕事が何であろうとも、すべての人からの愛を求めています」(手紙1、2番)。

「繰り返し強調しなければなりません。イエスは特権的な人々だけに向けて語ったのではなく、神の普遍的な愛を私たちに示すために来ました。すべての人は神に愛されていて、神はすべての人に愛を求めています。個人的な状況や社会的地位、職業や仕事が何であれ、すべての人にです」(知識の香、110番)。

これらの言葉の中で、キリスト者として生きる普通の人々の仕事が、直接的または間接的に、神との出会いの場、徳を磨く機会、使徒職と良い模範を示す機会として常に示されています。つまり仕事は、世の中に

あって聖性を求めることを可能にする手段として描かれています。

「この数年の間に主がオプス・デイ を興されたのは、すべての人が聖性 を求めるべきであり、大多数のキリ スト者はこの世にあって、日々の仕 事の中で自己を聖化すべきであると いう真理が、決して忘れ去られるこ とのないようにするためでした。そ れゆえ、人間が地上に存在する限 り、オプス・デイもまた存在し続け るでしょう。常に、あらゆる職業や 仕事に従事する人々が、それぞれの 身分や職業の中で聖性を求め、街中 で観想的な魂として生きることで しょう | (手紙3、92番)。

これらの〈光〉によって、聖ホセマリアは、世界を神へと秩序づける一さらにはアダムと私たちの罪によって歪んだ世界を再度秩序づける一という実現されるべき大いなる使命を眺めているように見受けられます。

彼はこの使命を、非現実的な理想としてではなく、実際的な目標として見ています。それは未来にある高尚なゴールではありますが、確かに人々を動かし、彼らの人生に対するコミットメントを支えるものです。

「これは実現可能なことです。むな しい夢ではありません。もし私たち が心に神の愛を宿す決意をするなら ば!私たちの主キリストは十字架に つけられ、その高みから世界を贖 い、神と人々の間に平和を回復され ました。イエス・キリストはすべて の人に言います: et ego, si exaltatus fuero a terra, omnia traham ad meipsum (ヨハネ12・32 [そして、わたしは地上から上げら れるとき、すべてを自分のもとへ引 き寄せよう])。もしあなたたち が、あらゆる地上の活動の頂点に私 を据え、その時々の務めを果たし、 大小にかかわらず私の証人となるな ら、omnia traham ad meipsum、す べてをわたしのもとへ引き寄せよ う。私の王国はあなたたちの間で現 実となるだろう! (…) キリスト教 の信仰を受け入れることは、被造物 の間でイエスの使命を継続すること への責任を引き受けることです。私 たちは、それぞれが alter Christus、 もう一人のキリスト、ipse Christus、キリスト自身にならなけ ればいけません。そうしてこそ、こ の偉大で計り知れない終わることの ない使命―この世界のあらゆる構造 を内側から聖化し、そこに贖いの酵 母をもたらすこと―に取り組むこと ができるのです | (知識の香、183 番)。

このように、オプス・デイの使命は、遠回しにではなく、直接的にイエス・キリストの教会の使命の中に位置づけられます。オプス・デイの使命は、すでにこの地上に存在しているがまだ完全には実現していない神の国を全世界に広げるために、酵

は主の足跡をたどらねばなりません、venit enim Filius hominis salvare quod perierat (マタイ18・11 [人の子は失われたものを救うために来た])」(手紙12、19番)。

普遍的な使命の中の固有な使命

オプス・デイの使命が、すべてのも のを再統合し和解させる御子の使命 に一とりわけ聖性の要である仕事を 通して一参与するものであることを 理解することによって、聖ホセマリ アが神の霊感に導かれて、いくつか の本質的な事柄について繰り返し説 いた理由が明らかになります。例え ば、神の子としての自覚、洗礼の重 要性、ミサの中心性、謙遜などで す。神の子としての自覚がなければ 御子の使命への参与は不可能です。 洗礼によって、私たちは聖霊におい て子として刻印を受け、尊厳と使命 を遂行する力が与えられます。ミサ において御子は、十字架上でただー

度すべての人のために成し遂げた、 世界と神との和解の業を行います。 謙遜は、キリストとともに仕えるこ とによって統治するために不可欠な 条件です。贖いの論理とは、アダム の傲慢な背信を、謙遜なヤーウェの しもべの従順によって取り消すこと だからです。

新しく設立されたオプス・デイは、 当然ながら使徒的な次元を目れています。なぜなら、なぜなら、なぜなら、なが歴史と教えがです。なが歴史と教えがの一部だからです。し初からはからです。からですが、創立との責任を対したがあったがです。というでは、できますでは、できますでは、できますでは、できますできますでは、ないるからです。

このようにオプス・デイの使命は、 教会の普遍的な使命の中の固有な使 命として位置づけられます。オプス・デイは、教会全体に委ねられたすべての人を聖性へと招き神の国東のものとするという使命に、の光〉をもって貢献します。の光は、日々の仕事や通常の活動の中でこの聖性への招きが実現し得る中でこの聖性へのことを通して神のことを示し、そのことを通して神のことを示し、そのことを明らかにします。

「私の子どもたちよ、主は、聖なる 教会を養い福音の精神を保持するた めの摂理の一環として、1928年10月 2日以来、オプス・デイに次の役割 を委ねました。それは、皆さんの生 活の模範と言葉によって、キリスト 教的完徳への普遍的な召命が存在 し、それを実際に追い求めることが 可能であるということを、すべての 人に対して明らかにするという役割 です。(…)神は、皆さんの、オプ ス・デイの精神に従って追求され た、個人的な聖性を通して、皆さん

がすでによく知っている次のこと を、すべての人に教えることを望ん でいます。それはすなわち、洗礼に よってキリストに結ばれたすべての 信者は、キリスト教的生活を十全に 生きるよう招かれているということ です。主は、私たちをご自身の道具 として用い、聖性への召命が、事実 普遍的なものであり、一部の人々や 特定の生活様式に限定されるもので はないこと、また、世を離れること を前提とするものではないことを、 そして、あらゆる仕事、あらゆる職 業が聖性への道となり、使徒職の手 段となることを、私たちが実際の生 活をもって人々に思い出させること を望んでいます」(手紙6、25-26 番)。

もちろん信徒の霊性を促進することは、オプス・デイだけでなく教会全体の役割ですが、神によって興され、新しく設立されたオプス・デイはその全体の使命の中において、仕

事の聖化を中心軸とした、固有の使命を持っています。

「子どもたちよ、オプス・デイ固有 の霊的・修徳的形態は、信徒の霊性 という枠組みに、ひとつのアイデア をもたらすということを強調したい と思います。それは1928年以来、私 が皆さんに何度も言ってきたことで す。つまり、私たちにとって、什事 は、キリスト教的完徳を目指すあら ゆる努力の中心軸であるということ です。世の中でキリスト教的完徳を 求めるにあたり、私たち一人ひとり は自らの職業において人間的な完全 性も追求する必要があります。そし て同時にその職業は、すべての使徒 的努力の中心軸なのです」(手紙 31、10番)。

オプス・デイの使命が教会の普遍的な使命の中の固有な使命である以上、オプス・デイに属する人々は、教会がキリスト者の霊的生活を養う

ために用いる手段を活用します。こ れらの手段一つまり祈りの生活、秘 跡に頻繁に与ること、福音宣教への 熱意、キリスト教的家庭の促進、教 導職の教えの普及など─は、当然、 他の教会組織でも奨励され、実践さ れています。それらの手段、教会の 中で生き・活動するために必要な手 段は、オプス・デイの使命の固有性 を取り消すものではありません。そ れらは救いにとって本質的なもので すが、オプス・デイはそれらに固有 の焦点を当てます。つまり、オプ ス・デイはそれらの手段に「メン バーが什事を通して自己を聖化し、 使徒となり、この世界の構造を神へ と導くよう努める」という方向性を 与えます。基本的には、すべての洗 礼を受けた信者は世界においてこの 使命を果たすよう招かれています が、オプス・デイはその道を照ら し、人々がその中を歩むことができ るようにします。これが聖ホセマリ アが好んだ「道中にある消えていた

街灯に再度明かりがつく」というイメージです。

言い換えれば、キリスト者の聖性を 促進する既存の一般的な手段を広め るためには、神はオプス・デイを興 す必要がありませんでした。それら の手段はオプス・デイの中にもあり ますが、それらだけでは、オプス・ デイの使命は説明できません。オプ ス・デイの使命を実現するには、そ れらの手段とともに「世界を変革 し、仕事や日常の務めを通じて世界 を神と和解させ、各瞬間の義務を果 たし常に主の証人となることにより キリストを人間の活動の頂点に据え ること」に適した霊的・知的・使徒 的な養成が提供される必要がありま す(『知識の香』183番参照)。こ れらのオプス・デイの養成が目指す 事柄にコミットせずに、キリスト教 牛活を牛きる手段を実践するだけで は、聖ホセマリアが創立したオプ ス・デイの一員となるには不十分で す。それゆえ創立者の教えの多くは、「オプス・デイに属するためには良い人であるだけでは不十分であり、よく働くべく努力することが不可欠である」というアイデアに焦点を当てています。

「どのような種類の什事をしていて も、同僚や友人を照らす灯になるこ とができます。オプス・デイの召し 出しを受けた人たちに私が常に繰り 返すことがあります。それは今、わ たしの話を聴いてくださっている 人々にも当てはまります。誰それは エスクリバー神父のよい子で、よい 信者だが、靴屋としては最低だと、 噂されるようなことが万一あれば、 聞き捨てにできません。自分の仕事 をよく研究し、心を込めてやり遂げ ようとしないのなら、仕事を聖化す ることも、神に捧げることもできな いでしょう。現世の事柄に浸ってい ながら、神と親しく交わる決意をし た者にとって、日常の仕事の聖化と

は、真の霊性の要なのです」(『神の朋友』61番)。

今後の記事では、教会におけるオプス・デイの使命を特定するこの固有性が、聖ホセマリアに与えられたカリスマに現れていることを示し、師が「普通の仕事」という概念をどのように理解し、それが日常生活にどのように適用されるかを詳しく述べます。

[1] Antonio Aranda, El hecho teológico y pastoral del Opus Dei, Eunsa, 2021参照。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/100shunen-heno-michi2/(2025/11/19)